

北陸の解剖略史

寺 畑 喜 朔

北陸における解屍を歴史的に通覧すると、藩政期には福井藩が中心となって先覚的立場から行なわれ、明治期に入ると、医育機関の設立とともに、金沢において近代医学の確立のために人体解剖が積極的に進められた。本稿では、その略史ととくに明治中期の解剖に関する資料について記述する。

一 福井藩の解剖

北陸における最初の人体解剖は、明和六年（一七六九）十一月十九日、福井東明里の刑場で、半井彦、山室知将の兩人により行なわれ、『蔵鑑』を遺した。この解屍に関する内容は小川鼎三、岩治勇一らの研究報告に譲る。

つづいて、藩政期にはこの解屍が先例となつて、つぎのように人体解剖が行なわれた（『福井県医学史』）。

(一) 文化二年（一八〇五）五月中旬、福井東明里に犯法分屍塚を建立する。十一月二十六日、福井医学所の人々が、小山谷仏所において男刑屍一体を解剖。

(二) 文政四年（一八二二）十二月十六日、越前福井の池田冬蔵（小森玄良門人）等、京都西郊の刑場で解剖し、解剖図賦を刊行。

(三) 文政十一年（一八二八）九月二十二日、福井の小山谷仏所にて刑屍男女二体の解剖あり、平野玄察、妻木敬蔵、

岩佐玄珪、勝沢愿が之に与つた。女屍解試略次は、勝沢の書いたその時の解剖記録である。

(四) 天保十年(一八三九)十月五日、福井の小山谷仏所にて、刑屍一体の解剖あり。半井仲庵、田代万貞、細井玄篤、妻木栄輔等が与つた。

(五) 天保十四年(一八四三)十月十三日、小山谷仏所で解剖があつた。

(六) 嘉永二年(一八四九)十月十六日、橋本左内等小山谷仏所において刑屍解剖。

(七) 安政二年(一八五五)十二月九日、福井小山谷仏所において男屍の解剖があつた。

(八) 安政六年(一八五九)二月十八日、勝山藩医秦魯斎、越前大野郡勝山において解剖を行なう。

(九) 文久元年(一八六一)十一月十三日、小山谷仏所にて男女二体の刑屍解剖と、これが解剖祭を行なう。翌二年正月細井東陽が、その所見をまとめて解臍図記三巻を作る。

また、福井藩の解屍については、山崎佐^(四)の報告も参考になる。

二 金沢における人体解剖

(一) 金沢における最初の解屍は、藩末期の明治三年七月で、金沢断獄より刑屍者二体が解剖用として金沢医学館へ供された。

この解剖の模様および研究は、金子治郎^(五)、長岡博男^(六)、酒井恒^(七)の文献で明らかであるので省略する。

(二) 最初の特志解剖^{(八)(九)}

金沢市上荒屋三丁目豊明湊八幡神社の前面にある上荒屋橋のたもとに凝灰岩で作った一基の顕彰碑(一三〇×八〇×三〇^(十))がある。碑文はつぎのとおりである。

人として人のためならずば人とあらざるにしかず 加賀国石川郡矢木荒屋村に竹川リンといふ女ありしぬるいまはに云

くおのが病は名あるくすしたちもしりかてにせりいかて身をほときてあきらめてよとてつひに明治十六年四月二十五日よはひ四十三にして身まかりぬ志のををしきますらをもしかさるべしあはれ身をほとくしのままあれと病のためにかか
るは石川県にして此人を始めとすあはれこの人なほははあり

世のためにゆるしなからもくれないのなみだや手にもふりかかりけん

人々このおや子のために石ふみものせんとてこうままにかくいうは

高橋 富 兄

明治十七年四月二十五日

此文筆せよともとのままにかきうつすは

石川県石川郡書記 青 木 六 郎

この撰文者の高橋富兄は、国文学者、歌人で後年第四高等学校教授となる。

この碑の左側面には、つぎの刻文がある。

竹川リン女難病ニ罹リ本院治療の処終ニ死亡シ母ソヨ其遺言に因リ病屍解剖ヲ委嘱ス即チ我院ニ於テ剖観ス是レ医術ノ
進歩ヲ促シ且后来患者治療ノ開明ヲ期スルニ至ル因テ彼ノ志ヲ憫量シ有志相醸シテ此墓碑ヲ建設スルモノナリ

石川郡徳丸村私立松江病院長

松 江 安 見

明治十七年四月二十五日

この碑文から、竹川リンは明治十六年四月二十五日（剖検は翌二十六日、後述）、私立松江病院長松江安見らにより特
志解剖を受けたことが明らかであり、長い間、郷土医史家（故長岡博男博士、津田進三博士、酒井恒博士ら）により剖検
記録の所在有無、その周辺資料の検索が進められてきた。

先年、著者は諸誌を検索中、『東京医事新誌』^(一)（第二七一号、明治十六年）を繙き、つぎの剖検記録を発見することがで

きた。

つぎに、その全文をかかげる。

○病体剖観記事

松江安見 寄送

明治十六年四月二十六日後五時加賀国石川郡徳丸村乙五拾九番地医師松江安見自宅ニ於テ病屍ヲ解剖ス則チ金沢医学校
教諭医学士外山林助全佐藤廉教諭大井文洞全石川孝恭等諸氏来テ執刀指示シ近郷ノ開業医師等数十名之ヲ傍觀ス

〔既往歴〕 石川県石川郡矢木荒屋村農竹川ソヨ長女リン齡四十三体格孱弱三歳ノ冬眼疾ニ罹リ四歳ノ春ニ至テ両眼全ク

失明セリ依テ農業ヲ操ルヲ能ハズシテ挽粉ヲ業トス十七歳ノ秋始メテ月経ヲ見爾來整然時期ヲ違ハズ又他ニ疾ム所ナシ
然ルニ四十一歳^{明治十四年一月}ニ至リ下腹ニ痛ミヲ覺ヘテ月経閉止ス但シ此疼日ナラス消散セリ故ニ之ヲ意トセス業ヲ操レリ四

十二年即チ明治十五年五月十日頃寒熱咳嗽咯痰ヲ発シ或医ニ治療ヲ托スルモ寸効ナク却テ増悪スルヲ以テ同月卅日余ニ
治ヲ求ム即チ之ヲ診スルニ身体羸瘦頭部ニ冷汗ヲ流シ呼吸息迫咳嗽頻發咯痰多量ニシテ血液ヲ混ステ体温撰氏卅九度二分
ニシテ一分時間ニ呼吸四十息脉搏強ニシテ百二十至食思減損舌上汚黄色ノ苔ヲ生シ舌縁紫黑色ノ斑ヲ呈ス胸部ヲ打診ス
ルニ右胸部ニハ濁音ヲ呈シ聴診スルニ右胸部ニハ捻髪音ヲ聴キ心部ニ当テ摩擦音ヲ聴知セリ腹部ヲ按スルニ臍部ニ硬塊
アリテ膨滿スルヲ恰モ妊娠八ヶ月程ナリ之ヲ庄スルモ痛ヲ發セス此塊ノ發生ヲ尋ネシニ記憶セスト云フ依テ祛痰鎮痙劑
ヲ投セシニ幾許ナラスシテ諸症減退シ大ニ爽快ヲ告ケ休業ス本年三月二十五日再ヒ診ヲ乞フ往テ之ヲ診スルニ咳嗽頻發
呼吸息迫スト雖^ニ熱候ナク脉八十至呼吸三十息体温三十七度三分ナリ治療スルヲ一週ニシテ休業ス患者予ヲ治セサルヲ
覺悟シ死亡ノ節ハ後世同患ノ為メ死体解剖ノ事ヲ親戚ニ遺言シ遂ニ四月二十五日前十一時頃業ヲ操リシニ忽然胸部窘迫
ノ状態ヲナシ大ニ煩悶シ一二ノ咳嗽ヲ發シテ斃レタリト之レ心囊水腫ノ為メト診シタリ

〔解屍所見〕 外山林助氏等交々指示シテ曰死体ヲ望見スルニ体格矮小ニシテ萎瘦シ甚キ老相ヲ呈スルハ実ニ年齢ニ符合
セス全身皮膚帶褐黄色ニシテ顔面及脊部ノ右半部ハ紫色ノ広キ死斑アリ面貌枯槁眼窩陷没シ右眼ハ前葡萄腫左眼ハ眼球

萎縮症ヲ呈シ鼻梁尖銳死後廿九時ヲ経ルモ四肢ノ強直甚シカラズ鼻口ヨリ帶黃水明ノ惡臭液ヲ流出シ口唇粘膜ハ紫色ヲ呈シ腭諸筋ノ強直ハ甚タシクシテ牙關緊急シ胸膛ハ著キ變形ナキモ乳房ノ發育不全ニシテ鎖骨上窩ハ強ク陥没スルト雖_ニ肋間ノ陥没ハ著シカラズ胸部ヲ打診スルニ右乳頭部ニ当テ僅ニ濁音アルヲ覺フ腹部ハ膨滿シテ臍囲ニ稍々綠色ヲ呈ス其周徑臍部ニテ七十三仙迷胸骨劍狀突起ヨリ耻骨縫際マテ三十七半仙迷臍ヨリ耻骨縫際ニ至ル廿仙迷ヲ計レリ臍ハ前上方ニ向ヒ皺襞ハ稍々消亡スト雖_ニ妊娠ニ於テ認知スル癍痕ヲ見ス打診スルニ悉ク鼓音ヲ放ツト雖_ニ耻骨縫際上ニ当テ微ニ濁音ヲ徵ス今此部ヲ触按スルニ運動性ノ一大硬塊アリ内診セント欲シテ先ツ腔口ヲ望ムニ処女膜猶遺存セリ未タ男子ニ云フ指ヲ腔内ニ進メテ検スルニ子宮腔部狹長ニシテ硬ク凡ソ三仙迷腔内ニ突出ス又隻手檢宮法ヲ施スニ此塊ハ正中ニ位シ偏倚スルコトナキヲ以テ考フレハ子宮ニ生セシ者ナルヘシ又直腸ヨリ検スルモ其硬塊強ク直腸ヲ押圧シテ甚タ大ナルヲ知ル可シ爰ニ於テ石川孝恭氏等刀ヲ執リ法ノ如ク胸腹部ヲ切開スルニ皮下脂肪組織減少シ筋肉瘠瘦甚タ淡紅ニシテ之ヲ截断スルモ出血ナシ今腹部ヲ検スルニ網膜ハ其色蒼白ニシテ脂肪消亡シ腸管ハ瓦私ニ由テ強ク膨脹シ管壁蒼白色ニシテ貧血ヲ呈セリ而シテ耻骨縫際上ニ當テ甚タ大ナル暗青赤色ノ光輝アル硬腫ヲ見ル其前方ニハ膀胱萎縮シテ潜在シ其ノ側后方ニハ広靱帶輪卵管卵巢存シ靱帶間ノ靜脈ハ著ク怒張シ卵巢ハ帶黃白色ニシテ萎少シ表面滑沢ナリ輸卵管ハ異常ヲ見ス此硬腫ハ子宮前壁ニ生シタル者ニシテ腹壁ニ向テ膨大ス之ニ触ル、ニ滑平ニシテ輕圧スレハ磊々トシテ硬ク稍々彈力アリ之ヲ剔出シテ檢スルニ殆ント三四歳ノ児頭大ニシテ其長徑基底ヨリ子宮口マテ三十仙迷基底ノ周徑三十八仙迷ヲ有シ其全量ハ二千瓦一瓦ハ我二分六厘六毛強ナリ今探子ヲ採リ子宮口ヨリ挿入スルニ其後壁ニ向フテ進ミ空隙在ルヲ触知ス之ヲ前面ノ正中線ニ沿テ割断シ子宮腔ニ達セリ其切面矢狀徑五寸計ニシテ其中央ハ帶赤黃色ニシテ累々トシテ起伏シ纖維ハ諸方ニ向走ス其前方腹膜下ニ纖維并行シタル一層ノ被膜ノ如キ部アリ又内方粘膜外ニモ同層アリ之即チ子宮肉質間ニ生セシ贅腫ニシテ其前後ノ境界ハ明瞭ナルモ基底部ニ於テハ交互吻合シテ区域ナシ是ヲ以テ考フレハ此贅腫ハ子宮基底部ノ肉質内ニ發生シテ子宮前壁肉質間ニ向テ増育セシモノナルヘシ贅腫ノ一片ヲ取り顕微鏡下ニ檢スルニ結締纖維不整ノ方向ニ走行シ

紡錘状細胞其纖維間ニ嵌入スルヲ見ル故ニ筋腫性纖維腫トス子宮腔ノ三角形ハ甚シク延長シテ二十六仙迷ヲ測知ス其他腹内諸臓ヲ検スルニ変状ヲ認メス只腹腔ニハ僅ニ澄液滲漏スルヲ見ルノミ次テ胸骨及肋骨ヲ切放セルニ心囊露出シ横隔膜ハ上挙ス其各臓ノ発見左ノ如シ

○心囊裡面ハ稍々滑沢ニシテ三十九瓦ノ漿黄色液ヲ含ミ肋膜ハ左右共ニ第三肋間以下ハ悉ク癒着シ殊ニ右方ハ靱带状ノ看ヲナス○心臓ハ膨大シ其壁変シテ至薄トナリ殊ニ右心ハ膨大ス室内ニハ血液ノ凝固塊ヲ容レ右静脈口ハ開大シテ三指ヲ容ルヘキモ左静脈口ハ狭窄シテ一指ヲ通スルニ過キス僧帽弁ハ硬固トナリ恰モ軟骨ノ如クニシテ閉鎖不全ヲ呈ス○肺ハ胸部ヲ開クモ萎小スルヲナク恰モ吸息ノ状態ヲナシ其色暗紅ニシテ殆ント褐色硬結ヲ為ス右肺根部ニ驚卵大ノ硬結アリ之ヲ割斷スルニ局処壞疽ヲ呈シ鱗色糊状ヲ含メル空洞ナリ他部ハ割面平滑ニシテ気管枝内ニハ泡沫痰ヲ充タシ血管ニ富メリ其他兩肺共ニ氣胞ハ悉ク澄液滲淫ス故ニ指圧スルモ嘔嘖ノ声ヲ発スル部僅ニシテ却テ暫時其痕ヲ止ムルヲ見ル以上剖観終リテ諸臓ヲ復故シ皮創ヲ縫接シテ法ノ如ク櫃ニ納ム

解屍后診按以上ノ諸件ニ由テ之レヲ觀レハ其死ヲ致ス所以ノモノハ心囊ニ統発スル肺水腫ニ因ルヘシ但シ子宮ノ贅腫ハ殊ニ大ニシテ多少栄養ニ損害ヲ与ヘシモ其性善良ナルカ故ニ敢テ之レカ為ニ死ヲ致ス者ニアラストス

この剖検記録の前文で明らかであるが、執刀者は当時（金沢医学校時代の初期）の医学校の教諭らで、剖検内容は精細をきわめており、見事なものだと判断している。また、子宮組織を顕微鏡下で観察しており、この点の記録としても貴重な資料と評価できる。

ところで、『東京医事新誌』の明治十六年版をさらに丹念に読んでいくと、第二八四号（九月八日）に松江病院の第二号と断じてよい「病体解剖記事」が発見された。この症例は七十六歳（男性）の卒中症で、前文はつぎのように記されている。

明治十六年七月三日石川県加賀国石川郡徳丸村私立松江病院仮解剖所ニ於テ庁許ヲ得警察官及ヒ親戚ノ者立会ニテ施行

ス則チ金沢医学校教諭石川孝恭氏執刀教示ス余ト松江甚作等ト補助筆記ス其他傍観へ近郷開業医等数十名ナリ
第一号と對比すると、つぎの点が指摘できる。

(一) 病体剖観記事が病体解剖記事となっている。これは松江安見が直接解剖に関与したことを意味している。

(二) 第一号では松江安見自宅、第二号では私立松江病院仮解剖所と剖検場所が明記されている。剖検に際しての規制が窺われる。

(三) 第二号では庁許ヲ得警察官及ヒ親戚ノ者立会トあり、剖検の許可手続の一端を知ることが出来る。第一号は多数の金沢医学校の教諭が参加している点からみて、医学校の出張解剖の形式で実施された可能性が大である。

(四) 第二号では医学校から石川孝恭のみが加わっているが、松江と石川の師弟関係からみて、松江が石川の協力を求めたものであろう。

(五) 剖検方式では、第一例は開頭していないが、第二例では開頭し、第三脳室内右側の線状体及視神経床上に鷲卵大の凝血塊を確認した点の特記される。

竹川リンの顕彰碑は、リンの一周忌にあたる明治十七年四月二十五日に建立された。碑の台石前面に有志者らの氏名が刻んである。彼等の当時の職分について、長岡博男、福田与盛の調査により略々確かめられたので、つぎに示す。

有志者：佐藤廉（医学士、金沢医学校教諭、内科）、木村孝三（医学士、金沢医学校教諭、外科）、石川孝恭（金沢医学校教諭、解剖）、大井玄洞（金沢医学校教諭、生理）、安達敬之（石川郡長）、青木六郎（石川郡書記）、逸見邁種（医師）、真沢七三郎（徳丸村医師、安見門人）、近藤源五郎（淵上村二口の十村）、水上鉦次郎（金沢医学校教諭、理学）、上田計二（金沢医学校教諭、生理）、永矢之孚（成村戸長）、高宮八十二郎（安見の弟昇の義父）、得能俊平（文学者）、増田常什（八ッ矢町医師、安見門人）、得田陳好（安見の弟）、木村弥三郎（徳丸村区長）、藤井長吉（松江病院調剤師）

発起人：逸見邁種、松江安見

世話人：松江甚作（安見の弟、医師）、松江兵二（安見の弟、医師）

（注）木村孝三は木村孝蔵の誤りである。

三 官制医学学校における解剖

明治二十年八月、第四高等中学校に医学部が設置され、十二月木村孝蔵を医学部長に任命し、翌年四月から官制医学学校が開学した。

先年、金沢大学医学部書庫において、剖検手続書類を綴った第四高等中学校医学部の「解剖一件」^{（一四）}（明治二十一年）同二十五年）を発見した。この綴には七十二件の解剖手続が収められており、解剖体の態様により手続が異り、今日的にみて貴重な資料であるので、つぎにその要所を示す。

（一） 刑死者の剖検手続

明二十五日於貴署囚人死刑可有之由該死体引取人無之候ハハ本部生徒解剖実験用トシテ御引渡相成度此段及御照会候也

本部

金沢監獄署御中

右は明治二十一年四月二十四日医学学校より監獄署への刑死者の引渡し照会文である。

記

一死体 壹個

但死刑者〇〇〇〇〇〇

右領収候也

明治廿一年四月廿五日

金沢監獄署

右は刑死者の受領文である。

死刑者 ○○○○○○

三十四年八ヶ月

右之者死刑執行候ニ付御請求之通り及御引渡候条領収証持参シ人夫御差向被下度且ツ実験済ノ上ハ其旨御通知相成候ハ
ハ直チニ看守立会埋葬可致候右御通知旁及御照会候也

明治二十一年四月廿五日 金沢監獄

第四高等中学校医学部御中

死刑者 ○○○○○○

右者解剖実験済ノ旨御通知ニ依リ明四日午前第九時埋葬立会之為メ看守名出頭為致候条運搬及ヒ埋葬人夫ハ貴部ヨリ
御差立相成度且原籍ハ石川県珠洲郡岩坂村ニ候

右及通知候也

明治廿一年五月三日 金沢監獄

第四高等中学校医学部御中

剖検は死体受領後、直ちに外表検査を終えりと薬液（内容不詳）を血管より注入し、翌日執刀（医学士山田謙治、介者
飯森益太郎）、上肢（二十七日）、軀幹（二十八日）、下肢（二十九日）、顔面（三十日）の順で解剖が進められた。

(二) 恤救（救療）患者の剖検手続

御施療ニ付受書

村井小右衛門

今回御院ニ於テ治療御許可相成候ニ付テハ御規則堅ク可相守ハ勿論万一不幸ニシテ死去候トキハ御見込ニヨリ剖見被下候モ不苦候条予テ此段御受申上候也

明治二十一年四月十九日

村井小右衛門^印

石川県金沢病院御中

右之者今般御治療相願候ニ付御規則等堅ク可為相守ハ勿論本人ニ係ル一切ノ事件拙者引受可申仍テ保証書如斯ニ候也

保証人 高山小助^印

本例は恤救患者（四十五歳）の剖検第一号で、大腿骨カリエス兼肝二口蟲症例である。

明治二十一年九月からは、書式はつぎのように改められた。

解剖願

今般〇〇〇症ニ罹リ金沢病院ニ於テ治療相願居候処万一不幸ニシテ死亡候節ハ医術研究ノ為メ御部ニ於テ死体剖見被成下后来同患者ノ裨益ト相成候ハハ死後ノ幸福ト奉存候依テ保証人連署此段相願置候也

明治〇年〇月〇日

本人 〇〇〇〇^印

年 月 日生

保証人 〇〇〇〇^印

第四高等学校医学部長 〇〇〇〇殿

(三) 特志解剖の例

解剖願

自分儀不幸ニシテ不治ノ症ニ罹リ再ビ起ツ能ハサルハ既ニ自ラ覚悟スル所ニ御座候就テハ死後医学研究ノ為メ屍ヲ解剖シテ病理ヲ探求シ世ノ公益ニ供セラレ度何卒願意御採用相成度親戚連署ヲ以テ此段予メ奉願上置候也

明治貳拾壹年八月十六日

石川県金沢区中本多町短町

四拾壹番地

士族 栗山得定[㊦]

五十七年八月

妻 ウ タ[㊦]

同県同区百姓町百四拾八番地

親戚 越田弥兵衛[㊦]

第四高等中学校医学部長 木村孝藏殿

剖検は翌十七日午前七時より医学士黒柳精一郎執刀（筆記、岸千尋助教諭）により始められた。臨床並びに病理診断は肺結核である。剖観者として、親戚五名、病院医員、医学生ら二十五名が記録されている。先祖由緒一類附帳（金沢市立図書館蔵）によれば、栗山得定は加賀藩定番御歩役を勤め、御切米高四拾俵と判明した。また、栗山の名は第四高等学校医学部解剖遺骸第一合葬交名碑（金沢市卯辰山にあり、明治二十一年～同二十九年の解屍者百名）の筆頭者として刻まれている。

「解剖一件」綴を年度別にみると、明治二十一年十三件、同二十二年九件、二十三年二十一件、二十四年二十一件、二十五年八件の解剖手続が綴られており、恤救（救療）患者がほとんどで、特志解剖は僅か二例である（他に刑死者二例あり）。

表 1 解剖学教室における解剖体数()は女性屍体
1892-1912

年度	生徒数	解剖体数	病理解剖体数
25	14	2(1)	
26	14	17(7)	
27	19	10(5)	
28	15	11(1)	
29	20	11(2)	
30	30	11(5)	
31	36	15(8)	
32	18	29(6)	
33	29	16(5)	11(3)
34	28	10(7)	24(12)
35	50	14(2)	12(5)
36	41	6(4)	15(8)
37	71	2(0)	21(11)
38	95	16(10)	39(19)
39	99	22(9)	39(11)
40	109	32(19)	41(20)
41	97	10(5)	47(24)
42	104	8(4)	56(21)
43	99	4(1)	42(19)
44	102	10(3)	55(23)
45	109	14(8)	53(24)

て、大分で積極的に剖検を行なっていた。この素地があったからであろう。

以上のごとく、官制医学校時代は明治十年代から興った病体剖観の全国的風調に同調して病理解剖が積極的に行なわれた。

一方、医育に必要な系統解剖は遅々として進展をみなかった。この間の事情を金子治郎の『回想録第二』^(二七)から、つぎに引用する。

余ガ就任頃ハ(注、明治二十九年八月)素ヨリ少数デハアッタガ生徒ノ員数モ多カラズ、小野慈善院カラ来ルノデ辛ク間ニ合ハセタ。左レド生徒数ガ増スニ従ヒ材料大ニ不足ヲ生ジ、富山、福井ノ両県ニ余自ラ出張シテ刑務所、赤十字

り)。診療科別では内科四十五件、外科十六件、婦人科四件、不詳七件と分類できる。また、内科の内訳で最も多いのは結核で他に梅毒、腎臓病、肝臓病、腸チフスなどがあげられる。

この時代に剖検を推進した者は黒柳精一郎(医学士、明治十六年卒業)、山田謙治(医学士、明治二十年卒業)、川瀬泰輔(医学士、明治二十年卒業)、飯森益太郎(石川県甲種医学校卒業)らで、とくに黒柳の^(二六)功績は大きい。黒柳は明治十六年より同二十一年まで大分県立医学校内科学教諭とし

表 2 自明治二十一年至明治四十二年 解剖屍体年別累計表

年号	本校 解剖 屍体 總数	解剖 学教 室収 容屍 体總 数	解剖 学教 室収 容屍 体男		解剖 学教 室収 容屍 体女		比例 本校 解剖 屍体 總数 ニ対 スル 解剖 屍体 總数 ノ百 分	二 對 スル 病 理 解 剖 屍 体 總 数 ノ 百 分 比 例	分 比 例 解 剖 屍 体 總 数 ニ 對 ス ル 男 女 兩 性 ノ 百 分 比 例	
			男	女	男	女			男	女
21	13									
22	9									
23	17									
24	27									
25	19									
26	19									
27	20									
28	23									
29	47	4	2	2	0	1				
30	31	12	7	5	4	2	38.7	50.0	58.3	41.7
31	42	27	11	16	4	11	64.3	55.6	40.7	59.3
32	66	32	23	9	12	5	48.5	53.1	71.9	28.1
33	27	21	9	12	3	4	77.8	33.3	42.9	57.1
34	31	23	11	12	4	1	74.2	21.7	47.8	52.2
35	66	54	26	28	5	10	81.8	27.8	48.1	51.9
36	72	59	39	20	14	10	81.9	40.7	66.1	33.9
37	81	71	34	37	13	18	87.7	43.7	47.9	52.1
38	69	57	31	26	6	5	82.6	19.3	54.4	45.6
39	76	67	42	25	5	3	88.2	11.9	62.7	37.3
40	63	50	26	24	3	1	79.4	8.0	52.0	48.0
41	74	68	36	32	7	3	91.9	14.7	52.9	47.1
42	85	68	35	33	7	10	80.0	25.0	51.5	48.5

病院、警察署等ニ交渉シ、大ニ特志者ヲ募集スルコトニナツタ。左レド兎角思フ様ニ行カズ、生徒數百名ヲ突破スルニ及ンデハ一屍体ヲ十二人ノ生徒ニ割附シタコトモ數年続イタ。左ニ掲ル表ハ生徒員數ト使用セル解剖体ノ數ヲ示ス。但シ生徒ノ員數ハ卒業者ノ數ニシテ屍体ノ數ハ其實習時明治三十三年代乃チ二年生時代ノモノナレバ、生徒員數ハ是ヨリ若干多カルベシ。又明治三十三年以前モ病理解剖後ノ屍体ヲ使用シタルニ相違ナキガ帳簿ニ明記ナキヲ以テ全身解剖ノミノ數ヲ挙グ(表1)。

つぎに、金子の解剖體數集計記録のほかに、中野鑄太郎(八) (解剖学副手、明治三十五年四月〜大正三年三月)の「本校解剖学教室統計」報告があるので、表示する(表2)。両者を対比すると、若干の計數の相違があるが、当時の解剖の実態を浮彫りにしているとみてよからう。

稿を脱するにあたり、医史学のご教導をいただいた故中野操先生に深甚の謝意を表し、また、本稿について多くのご教示をいただいた岩治勇一先生に厚くお礼を申しあげます。

- (一) 小川鼎三「明和六年福井における解剖、福井藩に於ける解剖の記録」『明治前日本医学史(復刻)第一卷』日本学士院編、一〇三頁、二二三頁、昭和五十三年
- (二) 岩治勇一「臧鑑―福井藩最初の解剖記録」『福井医科大学一般教育紀要』第四号、二九頁、昭和五十九年
- (三) 福井県医師会編『福井県医学史』一三二頁、昭和四十三年
- (四) 山崎佐「福井藩解剖小史」『日本医事新報』第一〇三四号、第一〇三号、二四頁、二七頁、昭和十七年
- (五) 金子治郎「解剖に就ての懷奮」『犯罪学雑誌』第三卷、一一六頁、昭和五年
- (六) 長岡博男「郷土における解屍の沿革」『石川医報』第二八三号、第二八四号、六頁、六頁、昭和三十六年
- (七) 酒井恒「加賀藩最初の人体解剖」『日本医史学雑誌』第一七卷第二号、二四頁、昭和四十六年
- (八) 寺畑喜朔「竹川リン特志解剖百年」『十全同窓会々報』第六七号、二五頁、昭和五十七年
- (九) 寺畑喜朔「特志解剖第一号の剖検記録を発見する」『十全同窓会々報』第七一号、一二頁、昭和五十九年
- (一〇) 寺畑喜朔「私立松江病院の剖検記録をめぐって」『北陸医史』第六卷、三六頁、昭和六十年
- (一一) 松江安見「病體剖観記事」『東京医事新誌』第二七一号、九頁、明治十六年
- (一二) 松江安見「病體解剖記事」『東京医事新誌』第二八四号、一四頁、明治十六年
- (一三) 福田与盛「名医松江安見の面影」『郷土と文化』第七号、一二頁、松任市教育委員会、昭和五十五年
- (一四) 金沢大学医学部蔵『解剖一件(明治二十一年―明治二十五年)』
- (一五) 寺畑喜朔「金沢における明治中期の剖検記録」『日本医史学雑誌』第三〇卷第二号、三三頁、昭和五十九年
- (一六) 高浦照明『大分の医療史』大同新聞社、昭和五十三年
- (一七) 金子治郎『回想録第二』五頁、昭和七年(この小冊子は金沢医科大学の求めに依じて作成されたもので一三頁から成っている。金沢大学医学図書館蔵)
- (一八) 中野錡太郎「本校解剖学教室統計」『十全会雑誌』第五八号、四〇頁、明治四十三年

(金沢医科大学臨床病理学教室)

A short history of dissection in Hokuriku

by Kisaku TERAHATA

In the Hokuriku districts, the first dissection was performed by Hiko NAKARAI and others in Nov. 1769.

Since the 19th century, records of nine examples of dissection still remain in Fukui.

In July 1870, the staff of Kanazawa Medical School practiced the first dissection, on the body of a criminal.

Dissections of the bodies of volunteers were performed for the first time by Yasumi Matsue etc. at Matto in April 1883.

Formal dissections did not make substantial advances until near the end of the 19th century.